

● 〈鈴木貞美『日本文学の成立』について小谷野敦がブログに「あらぬことを書いている」と人から教えられ〉に対し、小谷野君がふたつのリアクションを示してきました。

①ブログに、自分の文章を紹介しつつ、次のように書いています。

〈私が書いたのはこれだが、いったいこれに対して鈴木が何を答えたというのだろうか。何一つ答えになっていないではないか。私は「不注意を咎めるつもりで」書いたのではなくて、何を言っているか分からないから書いたのである。

「ヨーロッパやアメリカの(各国「文学」すなわち)人文学」という意味」というのは、どういう意味であろうか。日本では、日本文学の中に美術や哲学が入っている、というのか。英文学にはラスキンだって入っているし、コルリッジには(「の」の誤記か――鈴木)哲学も入っている。まったく、意味不明である。

なお、各国語に翻訳されているといったことは、レベルが高いということをもまったく意味しない。なぜならそれらは、人脈で行われることだからである。柄谷行人の『日本近代文学の起原』だって英訳されているが、あれは柄谷が米国へ行っていたからだし、日文研というのは外国の日本研究者をたくさん呼んでいるから、そこの教授であれば当然たくさん翻訳される。梅原猛の『地獄の思想』などという、ただのエッセイであって学問的にはゼロのものも英訳されている。『人間革命』も英訳されている。

(付記) 私は日文研の鈴木氏の研究会の研究員なので、いま鈴木氏にメールを出したら、本を読んでいないだろうと言わ

れた。確かに読んでいない。それには理由があって、片山杜秀の書評を読んだからである〉

このように書いたのち、『読売新聞』の片山杜秀の書評の前半を引用し、〈これではまるで片山の言っていることが意味不明である。だから読まなかったのである〉で閉じています。

②そして、この「付記」にあるように小谷野君からメールが来ました。以下、鈴木とのやりとりを公開します。

小谷野君の承諾を得ていませんが、次を読めばわかるように、鈴木から「公開の対話をしよう」と提案しています。鈴木の本を読まずに、書評だけ読んで「鈴木の間っていることはわけがわからない」とブログに連発している人からのメールですから、無断で公開してもいいと判断します。

○(2007年4月21時42分)小谷野君より鈴木へ

〈鈴木さま

いつもお世話になっております。

さて、「あらぬことを書いている」という文章を今ごろ発見しました。私は揚げ足とりをしているのではなく、普通に変だと思って書いたのです。要するに日本文学史には仏典も入っているとかそういうことなのではないでしょうか。しかし、日本書紀を研究しているのは文学者ではなくて歴史学者です。

「新日本古典文学大系」には「続日本紀」が入っていて、丸谷才一が、これは文学ではないだろうと言っていました、私にはちっとも日本文学が特異だとは思えないのです。〉

○(同11日22時00分)鈴木より小谷野君へ

〈小谷野さま

あなたは私の本を読んでいませんね。

読んでくれれば、あなたの疑問にすべて答えていることがわかるはずです。

丸谷さんの考えの出もとがどこかも、最終的には、わたしとあなたの考えが同じということも。

この文章、公開して、対話をつづけませんか。〉

○(同 11 日 22 時 09 分)小谷野君より鈴木へ

〈鈴木さま

はい、確かに読んでいません。これから読みます。

土曜日は猫猫塾という私塾をやっております、そちらへ行くことができずにおります。どうもすみません。〉

(鈴木注――「土曜日」云々は、日文研の鈴木が代表をつとめる共同研究会のこと。原則として、隔月の第3土曜、日曜に開いている)

どうやら、小谷野君は、ほんとうに何もわかっていないまま、ブログの記事を書いたらしい。

わたしは、わたしが各国の「自国文学」の範囲のことを問題にしているのに対して、小谷野君が欧米の大学でも外国文学を教えているなどと、見当ちがいのことを指摘し、まるで鈴木には常識がないかのように言っているので、「問題にしていることがちがう、アゲアシをとったつもりだろう」と思ったのです。「つもり」というのはアゲアシをとったことにもなっていない、という意味です。

中島某の書評と、さしてちがいはなく、「読めない」反応、「読まない」反応のひとつだと思ったわけです。

中島は、自分から「ストレッチガッタ」書評を書いておきながら、議論が「ストレッチガッテイル」などとカッコウだけつけたつもりになっているようです。が、小谷野君は「読まずに書いた」ことを率直に認めました。

なお、このようなりアクションに対しては、『「日本文学」の成立』(以下『成立』)で問題にしたことの要点をまとめて、HPに公開してあります。

ここでは〈日本では、日本文学の中に美術や哲学が入っている、というのか〉という小谷野君の質問に簡単に答えておきましょう。

はい、そのとおりです。『成立』のテーマは、明治期の概念編成(制)の話だということをおきませんが、小谷野君に分りやすく今日の例をあげます。

今日でも、日本の国立大学の「文学部」の教科に、「美術」や「哲学」が入っていますね。これは、ヨーロッパの”the humanities”にならったものですから、当然そうなったわけです。これが明治期の広義の「文学」の範囲です。

そして、これとほぼ同じ範囲を「日本文学史」は対象としてきたのです。今日でも、たとえば『新潮日本文学辞典』の巻末の「文学年表」には、空海『文鏡秘府論』や岡倉天心『東洋の理想』が載せてあります。この年表の編者は、哲学(東洋哲学)や美術も採っていることになります。

もちろん、歴史も入っています。頼山陽の『日本外史』なども入っています。

前近代のことだけでなく、『明治文学全集』も同じで、哲学も美術も編入していますね。

ところが、「文学」を「文字で書かれた言語藝術」という狭義(専門家のあいだでは 1910 年ころに定着)に限定して理解する人びとは、この広義のカテゴリーを用いることを「変だ」と感じるようになったのです。どうして「文学」に歴史

が入っているのか、などと。

かつて「日本文芸学」派は、広義に対して「近代的ではない」かのような批判を加えました。まるで広義の概念が、前近代の遺物のように考えたわけです。

小谷野君の引いている丸谷さんも、おそらく、その一例です。

夏目漱石『文学論』序文は、このふたつの概念のちがいを「伝統」と「西洋」のちがいのように述べています。それを鵜呑みにして、その解明には、まるであらゆる学問を総動員するのが必要だ、などと考えた人さえいました。たとえば前田愛氏がそうです。（『日本の「文学」概念』が出て、3年以上経ったのち、前田愛の名をあげて、鶴見俊輔氏も新聞で同じことを繰り返していました。まるで解決がついていないかのように。誰も鶴見さんに、こんな本が出ていますよ、と教えてあげる人がいなかったのでしょうか）。

「文学」の概念は、このように問題にされてきたものです。そして、このように「文学」の広義と狭義の関係が、まるで理解できていない人が、多いのも事実です。理解できていないという意味では、小谷野君もそのひとりということになります。

そのような状況に対して、「それは日本の新旧概念の対立ではなく、日本近代における広義と狭義の問題であること」「概念編成の歴史を解明すれば、すむこと」だと整理しなおしたのが、『日本の「文学」概念』（以下『概念』）だったので。

理屈だけでなく、多くの用例をあげて説得力をもたせました。関連するそのほかの問題にもふれているので、かなりの

大部の本になってしまいました(初版には誤記、誤植が多く、すぐに再版が出て、訂正してあります)。

『概念』についての鋭いリアクションは、むしろ海外の方が早く出ました。『概念』を読んで、目から鱗が落ちたように感じたという人が多くの手紙をくれました。

『概念』は、翻訳される前から、海外で博士論文などに引用する人が多く、そして、韓国語、英語、中国語の順に翻訳が決まっていたのです。

もちろん、これには海外の日本研究者との「コネ」が働いていることをわたしは否定しません。『概念』は、そもそも、外国人の日本研究者の何人もから勧められ、またヒントをもらってできた本です。

しかし、ただ翻訳されているだけではありません。多くの人びとが参照し、そこから新しい論考を展開していることはまちがいありません。

英語への翻訳は、何人もの人から申し出を受けましたが、概念に関する論述の翻訳は、たいへん難しく、信頼できるロイヤル・タイラー先生から言われたときには、わたしは願ってもないこと、「是非」に、とお願いしました。

彼は、たいへんな努力をはらってくれ、原著のあいまいなところなど、メールでやりとりしながら、原著より優れた内容にしてくれました。その意味で、名訳です。

英訳ができてから、参照される範囲もひろがり、最近では、日本文化についてのアラビア語の博士論文にもヒントを与えたようです。知らない人ですが、本人から礼状も届きました。中国文化を専門にしている中国人の研究者も参照しています。その方とは、最近、お会いしました。

わたし自身は『概念』の「質が高い」とは決して思っていません。手探りの跡が歴然としており、捕捉すべきことがたくさんあるからです。そこで、10年かけて問題領域の拡大と個別の深化をはかり、『成立』をまとめたのです。

『成立』では、「日本文学」の広義が、欧米の近代的「人文学」とも異なって、「宗教」「民衆文学」、外国語である「漢文」をふくんでいることについて、かなり突っ込んで書いてあります。

わたしは、それらの性格を「特異だ」とは、書いていません。この日本的な特殊性を「うまく逆転すれば」、ヨーロッパの近代人文学を超える新しい学問が展開できると書いたのです。

その「逆転すれば」を抜かして、片山君は「大風呂敷」のように評したのです。が、わたしは、まったく「大風呂敷」のつもりはありません。

すでに「宗教」を人文科学的に扱う態度は、かなり出てきています。

「民衆文学」「大衆文学」を差別しない態度は、国際的にひろがっています。

東アジアにおける中国語の役割、また近現代において日本語が果たした役割についての解明に挑んでいる人びともいます。

小谷野君が『成立』を読んで、どんな感想や質問をくれるか、楽しみにしています。小谷野君のリテラシーの質がためされるわけです。それだけでなく、新たな質問が発せられ、わたしの調査と考察が進むこともありうるでしょう。

なお、わたしは、内外の研究者から寄せられた質問には、

解答を HP で公開していることを申しそえておきます。質問とそれに答える時期を選ぶ権利は、わたしにありますが、わたしに答える能力がない場合には、率直にそういうつもりでいます。